

【p102～p107】 忘れない夏 嘉藤栄吉

1 資料活用にあたって

延長25回裏の試合の状況を教師が説明し、野球用語も適宜解説する。
本資料では、嘉藤栄吉さんの挫折感を克服する姿を通して、希望と勇気をもってくじけないで努力する心について考えさせる。

2 資料の読み方のポイント

変化するのは：嘉藤さん(子どもが「嘉藤さん」になって考えられるように発問を工夫する。)
変化するきっかけ(助言)は：また頭の上でひびいた竹山部長の言葉「頭を上げろ！胸を張れ！」
変化するところは：嘉藤さんは立ち上がりました。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ きみは「伝説の球児たち」を知っているか！！
明石中 中京商 延長25回 松本 大輔著 神戸新聞総合出版センター
未完のスコアブック
- ・ 東京文京区後樂園にある、「東京ドーム」の一角に「野球体育博物館」がある。ここには、昔の野球道具から世界のホームラン王・王貞治が使用したバットまで野球の歴史上貴重な資料が展示されている。そこに、この延長25回に及んだ「明石中 中京商」のスコアブックがある。しかし、試合を決めた1点が記されておらず空白のままである。公式記録員、広瀬謙三ですらペンを動かすのを忘れた一瞬には、ナインの汗と涙の物語がある。
延長25回
- ・ 現在の高校野球大会規定では、選手の健康を考慮して、延長18回打ち切り再試合となっている。しかし、そんな規定がなかったこの試合では、20回を超える頃から大会本部が再試合を検討していた。そして、25回が始まる前に、これ以上新しいイニングに入らないことが両軍ベンチに告げられていた。この時点で、明石中学の中田投手の投球は、打者91人に対し、被安打7，奪三振10，四死球8，球数は249球だった。
嘉藤栄吉さん
- ・ この試合当時は15歳。身長160cm少して小柄ながらも、同級生を押しつけレギュラーを獲得していた。もちろんチーム最年少であった。
- ・ この試合で悲劇の主人公となってしまった嘉藤さんは、「なぜ、私のところに最後のボールが飛んできたのか？」と、何度も自問を繰り返した。グラウンドに戻ったが、自分の責任を忘れたわけではない。答えが出たわけでもない。ただ、「もう一度、仕切り直して、努力するしかない。」と考え、運命の一球と生涯向き合っていく覚悟をした。気持ちの整理がつき、笑顔で振り返れるようになったのは、それからずっと後のことである。
- ・ 自分の弱さを知った嘉藤さんは、強く生きた。家族の方の話によると、常に自分に厳しい人で、弱音を吐いたことなど全くなかったそうである。講演を頼まれることも多かったが、1時間以上に及ぶ講話の原稿をすべて暗記して当日に備えた。資料にある平成15年の全国高校野球大会兵庫県大会、開幕戦の始球式の前には、自宅近くの公園で、何度も何度も練習してボールを投げ込んだ。そこまでがんばらなくても・・・と感じたことが何度もあったそうである。
竹山部長
- ・ 延長25回戦から2年後の1935年、転勤により明石中を去った。しかし、当時の部員との親交は続いた。竹山先生は、同窓会のたびに、嘉藤さんの顔をのぞき込んで、「8月19日のこと、まだ気にしとるとちゃうか？気にしたらあかんぞ。」と、言った。嘉藤さんが50歳になっても60歳になってもその温かいまなざしは変わらなかったという。この優しさが運命の一球と向き合う嘉藤さんを支えた。

4 展開の具体例

- ・ **主題名** ・挫折を乗り越えて 1 - (2)
- ・ **資料の概要** ・延長 25 回、一点も許されない状況で、一瞬弱気になった自分のミスによりチームを負けてしまった嘉藤さんは、自分を責め続けた。家に帰ってからも3日間、試合について考え続けた末、「もう一度仕切り直して努力すべきだ」とようやく思えた時、嘉藤さんは、竹山部長の叱咤が心によみがえり、グラウンドに向かって駆け出す勇気がわいてきた。
- ・ **ねらい** ・家に閉じこもり考え続けた嘉藤さんの頭上に響いた「頭をあげる！胸を晴れ！」という竹山部長の言葉に、道徳的に変化する嘉藤さんを通して、くじけずに希望と勇気を持って前進していこうとする道徳的実践意欲を育てる。

・展開の概要

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	高校野球で「伝説の試合」があったことを知っていますか。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・試合が終わり、顔を上げることができない主人公の気持ちを考える。 ・家に閉じこもった三日間の主人公の気持ちを考える。 ・チームメイトが待つグラウンドに向かって駆け出した主人公の気持ちを考える。 	<p>高田監督の言葉かけにも頭を上げることができなかった嘉藤さんは、どんな気持ちだったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のミスで大変なことをしてしまった。 ・どうしたらいいんだ・・・。 ・先輩たちに申し訳ない。お詫びのしようがない。 <p>家に閉じこもって三日間、嘉藤さんはどんなことを考えたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のエラーであの大勝負を終わらせてしまった。 ・自分に飛んでこなければこんな思いをしなくてもよかったのに。 ・もう少し1塁よりに飛んでいてくれれば私の守備範囲でなく、こんなに苦しまなかったのに。 ・もう少し2塁寄りに守っていれば、サヨナラヒットで終わり、こんなに苦しまなかったのに。 <p>グラウンドに向かって駆け出した時、嘉藤さんは心の中でどんなことを言っていたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もう一度がんばろう。 ・閉じこもっても何も解決しない。 ・自分の所にボールが飛んできたのは、偶然ではない。自分を磨かなくては。 ・自分の弱さをはねのけて自信を持てるように努力しよう。 ・もう逃げないぞ。
終 末	・「imagine」を読む。	副読本の107ページを読みましょう。

延長25回の試合の様子をおさえる。

責任の重大さにどうしたらいいのかわからない主人公の心を考えさせる。

主人公が、自分の失敗を直視する勇気をもてず、挫折感を克服できないことをおさえる。

頭の上でひびいた竹山部長の言葉がきっかけとなり、主人公が「現実を直視し、くじけずに希望と勇気をもって取り組もう」という実践意欲を強めていることをおさえる。